

青島構成員資料

「何をどのように検討すべきか」

20150115

一橋大学イノベーション研究センター 青島矢一

基本的な視点

- 地域資源の活用を考え、地域資源の創出は考えない。「あるものの活用」と「ないものの創出」を分けて考える。
- (特に、ものづくりプロセスにおいて) 地域資源が活用されない理由を、「活用上のボトルネックが存在している」という点から考える。
 - ボトルネックは、(単純化すれば) ものづくりプロセスにおける、以下のいずれかの過程で生じる。地域資源がどこに存在して、どこにボトルネックがあり、そのボトルネックの解消に、技術がどのように貢献するのかの検討が重要。
 - ☆ ニーズの収集→アイデア創出→設計(機能設計、詳細設計)→試作・試験→生産→販売
 - 価値の創出は通常ボトルネック工程の解消プロセスにおいて生じる。地域資源が重要なボトルネック工程になることが鍵。
- ボトルネックの克服を通じて地域資源の活用のために「なにをどのように検討すべきか」を考える。
- さらに、「単に知られていない」、「地域資源が価値を生み出す結合方法がわからない」というのも、地域資源が活用されない理由であり、これも検討すべき点である。

検討事項

- ボトルネック→「試作コスト」「少量生産コスト」; 強み→アイデア、設計
 - 新しい生産技術を活用する側での価値創出を考えるのであれば、新しい生産技術が汎用化・低コスト化し、誰でも使えるようになるのが好ましい。生産技術のところにボトルネックと希少性があるのは望ましくない。
 - 新しい生産技術の「徹底的な低コスト化、汎用化」のためにどのような技術開発が必要になるか(ハード、材料、ソフト)を考えるとともに、ここに希少性をつくらないためにはどうしたらいいのかというグローバルな戦略(標準化戦略を含む)の検討が重要になる。
- ボトルネック→「アイデア」「設計」; 強み→生産技術・ノウハウ
 - 世界中にあるアイデアをいかにして地域の強みである生産ノウハウで実現するか、その連結が鍵となる。この場合にはアイデアや設計情報をなるべく汎用化す

るのが望ましい。

- たとえばアイデアを具現化した形状 3D データの利用可能性を広い範囲でいかにして高めるか。その仕組みづくりの検討が必要となる。
- ボトルネック→「販売」；強み→生産技術・ノウハウ
 - 地域資源の情報をいかにして広く公開するか→ノウハウのデータベース化、評価などのシステム。
 - 販売ルートを持つ大手企業との連結をいかにすすめるか。
- これは技術開発とはいえないが、ボトルネック資源の解消を大企業とのコラボで行うことの検討は重要である。日本では相変わらず大企業が技術と人材を抱え込んでいる。これを流動化させ、地域の特徴ある資源と結合させる方法（CV による資金供給とか技術者や生産設備のレンタル、販路の共有など）を考えることが重要（eg. 中国の集積の事例）
- 「単に知られていない」場合
 - 地域の強みをきちんと分類、整理して、いかに「見える化」するか。その方法の検討。
- 「地域資源が価値を生み出す結合方法がわからない」場合
 - 結合の試行錯誤の場をつくる必要がある。